

久松潜一著

和歌史第五卷

近代以前
及び
近代

東京堂出版

著者略歴

明治27年12月愛知県生れ・
東大卒・東大名譽教授・文
学博士・学士院会員

主な著書

日本文学評論史全5巻・和
歌史全5巻・国文学通論・
万葉研究史・日本文学史全
2巻・日本文学研究史・久
松潜一著作集12巻、別巻1
巻・その他

© 1970

和歌史 第5巻

¥ 2200

昭和45年12月5日

初版印刷

昭和45年12月15日

初版発行

著者

ひさ まつ せん いち
久松潜一

東京都千代田区神田錦町3の5

発行者

岩出貞夫

東京都新宿区改代町24

印刷者

田中昭三

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町3の5

電話 東京291局8226 振替口座 東京270番

印刷 理想社印刷株式会社 製本 渡辺製本株式会社

序

和歌史第四巻をまとめてから、いつしか三年ほどになる。ここに第五巻を刊行することになったが、この巻は近代の和歌史を主とすることになった。昭和三十七・八年頃日本女子大学の講義に近代の和歌史をとりあげることで一年間これを扱ったのが本書の第二編になっている。子規系統の和歌に入っただけで終ったので、その後の和歌についても扱いたいと思いつつそのままになって今日に及んでいる。それはいつ果せるか定めがたいので、すでに講じた所までを収めることにし、多少の増補を行った。「佐佐木信綱と心の花の歌人」の項は講義では簡単であったが、日本歌人講座に歌人佐佐木信綱博士を執筆することになり、それに書いたのをそのまま収めることにしたので、他の部分と均衡を失うことになったが、これはそのためである。

近代和歌史考だけでは量も少いので、この和歌史を書いている間に発表した近代以前の和歌史を補うべき若干の稿を、まとめて第一編とすることにした。このようにしてこの巻は近代及び近代以前の和歌史考というような性質のものとなった。第五巻としてははじめ企画した所とやや異なってきた。しかし考えて見ると、近代和歌史もしくは近代短歌史の研究は近來極めて盛んである。斎藤茂吉氏、小泉茅三氏、木俣修氏、新聞進一氏その他によって近代短歌史のすぐれた著書も多く刊行されている。与謝野晶子、斎藤茂吉、北原白秋、石川啄木ら個々の歌人の研究

も多く現れている。

近代和歌史だけを専門としていない私は、この巻を近代和歌史に限定せず、近代以前の和歌史の補遺をも加えて、和歌史の諸問題のような内容とすることが、私の和歌史を結ぶには却てふさわしいと思われるのである。

昭和四十五年十一月

久松 潜 一

和歌史第五卷 目次

近代以前及び近代

第一編 近代以前の和歌	七
一 和歌史における三歌人	九
二 万葉の歌人	三
三 万葉歌風について	元
四 平安朝和歌の展開と女流	三
五 百首歌について	四
六 順徳院御百首考	三
七 万葉歌風と玉葉歌風	四
八 良寛の人と歌	六
九 大隈言道の歌	六
第二編 近代の和歌	六

第一章 近代和歌の萌芽……………九

一 桂園派の歌人……………九

二 明治初期の新題和歌……………六

三 海上胤平の歌論と和歌……………九

四 天田愚庵……………二

第二章 近代和歌の成立……………二六

一 落合直文の歌論と和歌……………二六

二 佐佐木信綱と心の花の歌人……………三三

第三章 近代和歌の展開……………一六

一 与謝野寛の和歌……………一六

二 明星と与謝野晶子……………一七

三 尾上柴舟と金子薫園……………一八

四 正岡子規と伊藤左千夫……………二〇

五 長塚節及び子規系統の写生説……………二九

和歌史研究書略解 五……………三七

索引……………三六

近代以前及び近代

第一編
近代以前の和歌

一 和歌史における三歌人

一

和歌史の上で三歌人をえらぶとすればいずれをとりあげるのが適當であろうか。これについては選ぶ標準によって種々のとりあげ方がある。佐佐木信綱氏はかつて柿本人麻呂と和泉式部と西行とをあげられた。これは和歌史の組織の上よりは歌人の上だけからとりあげたと言える。また太田水穂氏は柿本人麻呂、紀貫之、藤原定家、香川景樹の四人をあげ、

予はつねに惟ふ、上代紀記以来の古風を大成した人麻呂、遍昭・小町・業平以来の中古風を大成した貫之、曾丹・俊頼・俊成以来の新風を大成した定家、之に徳川の景樹を加へてこれを和歌の四鎮護と呼ぼうと思ふのであるが、異議があるであらうか。不思議にも大成者といふ大成者はおほむね正反の対立を統一する今の地点に立つてゐる。

と言っているのは和歌史の組織の上からこの四人をあげたのであらう。その他種々の観点からあげられるであらうが、私はここでは和歌の類型の上から柿本人麻呂と藤原定家と良寛との三人をあげて見たい。和歌の出発点として、もしくは歌謡と和歌との境にあり、集団的の和歌と個性的の和歌との境にある歌人として柿本人麻呂を第一にあげる。つぎに和歌史の中で唯美的な和歌の極点になつた歌人として藤原定家をあげ、人間的な和歌の極点になつた歌人として良寛を挙げたいのである。

そうして是等三人の歌人の特色を考察することによって和歌史上の三の類型を明らかにして見たいのである。

柿本人麻呂については種々の考察すべき点があるが、人麻呂観については、二もしくは三の対立した見解がある。一は人麻呂を歌聖と仰ぎ重んずる考であり、これが主要なる流れであるが、近代に入ってから人麻呂を御用歌人として批判する長谷川如是閑氏の見解などが現れて来た。これは人麻呂の歌に詩人としての感動よりも、宮廷歌人としてよんだ儀式歌の類型性を認めようとした点があり、人麻呂の歌の一面をついた批判と見られる。しかしそれは従来の人麻呂観にも見られた一面を強調したものであったが、それに比べると民俗学の方面からとかれた人麻呂観は従来の人麻呂観と対立するものがある。人麻呂を柿本氏の一人として見、その歌もその氏族の共同体を表したと見るのである。人麻呂の歌を個性的にすぐれた歌としてよりは、伝誦的な歌として見ることになる。人麻呂の歌が個性歌であるか伝誦歌であるかということは人麻呂評価の上にも重要な点であるが、両者は全然相いれない説ではなく両者をともにつつんでいるのが人麻呂の歌であると言える。

人麻呂の歌に伝誦性のあることは認められる。その流麗なる声調には伝誦的な点がある。人麻呂の歌が新羅使の難波の海で舟泊りしていた月明の夜にうたわれたことは、万葉集巻十五の歌によって知られる。それは巻三に見える羈旅の歌を少しく詞句を変えてうたわれているのは、人麻呂の歌が伝誦歌であるというよりは人麻呂の歌が流麗な声調であるがために後に誦詠されたと見たい。これは人麻呂の近江荒都をいたむ歌に或云、一云として本文の異同があげられること、石見から妻に別れて都に上る時の歌にも或本云として異同のある歌があげられることを見ても語られたために、種々の異同が生じたと思いたい。これについては沢瀉氏のように人麻呂の第一草稿、第二稿と見

る説もあるが、私は伝誦されたために生じた異同と見たい。また人麻呂歌集の歌が卷十四の東歌に入っているのも人麻呂の歌が東国へ旅行したものによって謡われたと見られる。もとより人麻呂歌集の歌は人麻呂の歌であるかどうかは研究を要することであるが、ここではその問題に深く入らない。また人麻呂の歌と卷十三の長歌に類似句の多いのは人麻呂の歌が卷十三の歌に影響したか、卷十三の歌が人麻呂の歌に影響したかが問題であるが私は人麻呂の歌が影響したと見たい。卷十三の

天雲の影さへみゆる　こもりくの　長谷はつせの川は　浦なみか　船のより来ぬ　磯無みか　あまの釣りせぬ　よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　磯は無くとも　奥つ波　きほひこぎりこあまの釣船(三二二五)

反歌

さざれ波　浮きて流るゝ　長谷川　依るべき磯の　無きがさふしさ(三二二六)

の歌が、人麻呂の石見から別れて来た時の歌の

石見のみ　津の浦をなみ　浦無しと　人こそ見らめ　かたなしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　かたは無くとも　いさなとり　海べをさして(下略)(一三八)

と類似していることは明らかである。両者を比べると石見の海の形容としてはふさわしいが、泊瀬川の形容としては不自然である。泊瀬川に対して「浦なみか船のより来ぬ磯無みかあまの釣りせぬ」というのはどうしてもあり得ないのである。これは人麻呂の歌にならって詠んだものとしなければならぬ。そうすると卷三の人麻呂の磯旅歌と卷十五の新羅使の、誦詠した歌と同じ関係になる。

私はかつて人麻呂の長歌と祝詞との関係をば、人麻呂が祝詞の詞句や構成から学んだこともあるかも知れないが、人麻呂の歌のすぐれた詞句が祝詞文の成長に影響したことも十分にあり得るとのべたことがある。人麻呂の歌が誦

詠され、また他の文芸に影響したことは意外に大きいことを認めたい。と同時に人麻呂の歌も忽然として生れたものではない。それまでの神話、祝詞、歌謡などは人麻呂の歌にとり入れられ、それらが母胎となって人麻呂の歌が形成されたことを認めざるを得ない。人麻呂の歌に神話的事柄がよまれているが、これについて私はかつて同じく舍人として天武天皇の御代以来官廷に仕え、持統、文武、元明天皇の御代にも仕えていたであろう稗田阿礼と人麻呂が知り合つてそれから伝えられたであろうかと推測したことがある。^(注二) 近くは人麻呂の一族、即ち柿本氏が神話を伝承した家柄であろうかとする説も出された。いづれにしても人麻呂は古事記の成立する前にその素材となった帝紀や旧辞の内容を知り、それを皇子や皇女の薨去をいたむ歌によりこんだと見られる。また人麻呂以前の祝詞がどのような形態であつたかは現存祝詞の中で人麻呂以前の祝詞がどれだけあつたかもはっきりしないので、明瞭なこととは言えないが、祝詞にある神話からも人麻呂は神話知識を得たであろう。ただ祝詞の文詞になると現存祝詞は却て人麻呂の長歌から学んだものがあつたではなからうか。現存祝詞の詞章の固定したのは遅れて奈良時代もしくは平安時代になってからであろうと推測するからである。

人麻呂以前の歌謡を人麻呂は見ていたであろうが、それをどれだけ人麻呂はとり入れたであろうか。記紀歌謡と人麻呂の歌とを比較して見てもはっきりつかめない。万葉集の中の歌謡的な歌と人麻呂の歌との関係は前述の如くであるが、しかし、これらの類似は人麻呂の歌の影響と認められるのである。倉野氏の言われるように更にそれ以前の歌謡があつてそれが人麻呂の歌にも十三の巻の歌謡にも影響したと見られなくもないが、それもそう断ずる証はない。

いづれにしても、人麻呂の歌に伝誦的性質の多くあることは認められる。と同時に人麻呂の歌が伝誦的な性質の